

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「移民／難民のシティズンシップ—国家からの包摂と排除をめぐる制度と実践—」
(平成 25 年度第 1 回研究会)

日時：平成 25 年 4 月 21 日（日曜日）午後 1 時より午後 6 時半

場所：AA 研マルチメディア会議室(304)

報告者名（所属）：**報告 1** 辻上奈美江（AA 研共同研究員，東京大学）

「外国人労働者が支えるサウディアラビアの労働力の自国民化政策」

湾岸諸国における外国人労働者には、三つの特徴がある。そのひとつ目は、大量の一時労働者を受け入れる点にある。湾岸諸国への外国人の流入は、大規模な移民を基礎にした国家建設を推進したかつてのアメリカ、カナダ、オーストラリア型とも、移民の規模を最小限に抑えようと努力しつつも民主主義体制下で、移民が市民権を獲得することは避けられない現代の EU（フランス、イギリス、ベルギー、ドイツ、オランダ）型、そして労働移民を基本的に禁止している日本型とも異なる。石油輸出を通じて得られた資金で外国人労働力を大規模に輸入しつつも、他方で彼らの帰化を禁止する湾岸諸国の「レント依存型」とも呼べる外国人受け入れ政策は、ひとつの類型を形成しつつある。もうひとつの特徴は、この大量の外国人労働力がほとんど非アラブ系で占められていることである。アジア系を雇用する理由としては、アジア系は低賃金で効率性が高いこと、従順で管理しやすいこと、家族を国に残して単身で渡航する者が多く、一時労働者となりやすいことなどが挙げられる。そして第三の特徴は、「エスノクラシー」と呼ばれるもので、自国民が労働市場の特権的立場を占め、外国人労働者とは賃金や労働環境面で大きな格差が設けられていることが前提となっていることを意味する。

本研究が扱うサウディアラビアについてもこれらの特徴を有しているが、自国民若年層の失業問題の深刻化に伴い、サウダイゼーション（労働力の自国民化）を 1994 年に開始した。だがサウダイゼーションは民間セクターのサウディ人割合を増やすことには十分な成果をあげられなかった。そこで 2011 年にはサウディ人被雇用者の割合で企業を 4 つにゾーン分けする労働省の取り組み「ニターカート」を開始した。「アラブの春」後、本格化したニターカートは、民間企業をシルバー、緑、黄色、赤の順に 4 段階に色分けするシステムで、優良企業には外国人への労働ビザ発給、ビザ更新などが有利になる仕組みである。同時に、外国人の滞在許可証 (Iqama) 更新料の引き上げを行い、外国人雇用のコストを上げた。

サウディアラビアは、ニターカートを通じて「湾岸型移民」からの脱却を試みている。他方で人口増加と石油需要の拡大により、将来、石油輸入国になるとの分析もあるほどで、経済多角化は必須の課題である。そしてそのために外国人労働者を完全に排除することは不可能とも考えられる。労働力の自国民化は一定の外国人労働者の存在を想定しながら進展するしかない中で、両者のバランスをどのようにとっていくかが今後の課題となるだろう。

報告2 床呂郁也 (AA 研共同研究員, AA 研)

「フィリピン南部ムスリム社会における「移民／難民」状況のダイナミクス」

今回の報告では、フィリピン南部におけるムスリム少数民族像とフィリピン政府のあいだのいわゆるミンダナオ紛争に絡んだ移民・難民をめぐる状況の動態をテーマに報告を行った。まずフィリピンの宗教事情の概要について述べると、フィリピンはスペインやアメリカによる植民地化の結果として国民の約9割がキリスト教徒であり、ムスリムは推定で総人口の5から7%前後を占めるマイノリティである。フィリピンにおけるムスリム諸集団は「モロ (Moro)」と総称され主にフィリピン諸島の南部に位置するミンダナオ島やスールー諸島を中心に居住している。イスラームは13世紀頃にはフィリピン諸島に伝わり、15世紀以降にはスールー王国やマギンダナオ王国などスールーやミンダナオでイスラーム王国が成立した。16世紀以降にはフィリピン諸島の植民地化を目指すスペインと、それに抵抗する現地のイスラーム教徒 (モロ) との三世以上に及ぶ戦いであるいわゆる「モロ戦争」が続いた。20世紀に入るとスペインに代わってフィリピン諸島の統治権を獲得したアメリカによる植民地化が開始され第二次大戦後にはスールーやミンダナオのムスリム居住地域もフィリピン共和国へ編入されることになった。しかしアメリカ植民地統治期以降にはフィリピン北部のキリスト教徒の農民を南部のミンダナオ島へ移住させる国内移民政策が推進され、結果として従来はムスリムが多かったミンダナオにおいてもキリスト教徒人口が増加し人口比でムスリムを圧倒するという事態を招いた。この過程で窮乏化、周辺化を余儀なくされたミンダナオなどのムスリムは1960年代末から1970年代にかけてフィリピンからの分離主義武装運動を開始するに至った。ミンダナオではムスリム分離主義組織の一つであるモロ・イスラーム解放戦線 (MILF) とフィリピン政府が、和平交渉を継続しつつ断発的に武力衝突も起きるといような一進一退の状況がここ数年、続いている。とくに2008年8月には一時的に再び激しい武力衝突が発生し、100万人前後という規模の国内避難民 (IDP) を出すなどミンダナオのムスリム住民に大きな影響を及ぼしている。今回の報告では報告者の現地におけるフィールドワークを基にミンダナオにおける近年のIDPの状況、ならびに近隣の東マレーシア・サバ州への大量のフィリピン系ムスリムの国外難民の状況に関して報告と検討を行った。また最後に、今年 (2013年) 2月に発生したいわゆる「スールー王国軍」 (Royal Security Force) を名乗る集団のサバへの侵入事件と、それによって生じた同集団とマレーシア政府治安部隊のあいだの武力衝突によって、これまでフィリピン南部からサバへ流れ込んでいたフィリピン系ムスリムの人のフローが逆転しつつあるという新たな状況についても報告と考察を行った。